

港区)が大学生5人の一生に改めて課罪した。内定を取り消した問題で、学生3人が加入し交渉をしていた全国一般東京東部労組(岸本町雄委員長)は2日、同社と協定書を締結し問題が解決したことを明らかにした。

労組によると、協定書で会社側は「精神的

がんを生きる

住みなれた家で

②

経団連に全労連を交した「一」と話している。

労組によると、組合員の3人は内定が取り消された後、就職活動を再開、1人は新たな内定が取れたが、2人は就職先が決まらず、留年せざるを得ないという。

須田光照書記次長は

電話がひっきりなしに鳴っている。先月29日、東京・市ヶ谷の白十字訪問看護ステーション。統括所長の秋山正子さん(58)が受話器を取る。「がんの患者さん、お願いできませんか」

かけてくるのは、ケイスワーカーやケアマネジャーだ。「本人は病状を理解してますか」。質問するうち、別の電話も鳴り始めた。

白十字は、訪問看護制度ができる12年前の80年に前身組織が活動を始めた草分けだ。介護・看護専門の株式会社が運営する。現在の患者は140人ほどで、2割ががん患

者。15人の看護師が分担し、自宅で療養する患者を支援している。

夕方のミーティング。「患者さん、今日はちょっと苦しう。お嫁さんも疲れていた」。秋山さ



さんも家族のことが気になる。家でケアを受けさせたら」と提案した。光子さんが退院すると、家族に会話が戻った。

光子さんは翌年の桜が散るころ41歳で亡くなったが、秋山さんは「親子4人そろつとほっとする」と光子さんが日記に

「ごはんは食べられてる？」。担当の看護師から患者の様子を聞く秋山さん。東京都新宿区で、武市公孝撮影

患者本位へ「まず一步」

れ、在宅療養に関心が向かないという現実だ。こんな経験があった。06年10月、担当していた末期の子宮がん患者(72)が腸閉塞になった。秋山さんが大病院の担当医と相談、一時入院させることになり、付き添って病院に行った。

だが、したはずの予約がされていない。担当医に連絡がつかず、女性と受付前の廊下に放ってお

【石原聖】

んは患者と家族の様子について看護師から報告を受ける。午後10時過ぎ、長い一日が終わった。秋山さんが訪問看護の現場に入ったきっかけは、姉の光子さんを在宅療養させたことだった。

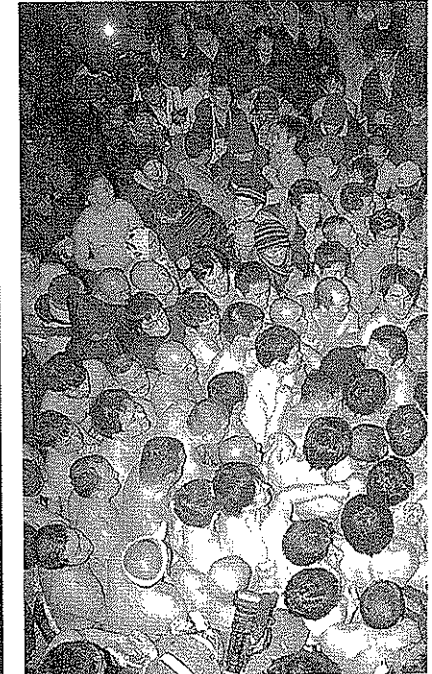
89年11月、京都の看護専門学校で教員だった秋山さんは、神奈川に住む義兄から、光子さんが末期の肝臓がんと知らされた。光子さんには小学生と中学生の息子がいた。秋山さんは義兄に「姉

書いていたことを後で知った。「在宅療養が家族の絆を深めた」と思った。

17年間訪問看護を続けてきて、秋山さんが痛感するのは、患者も医師も病院での治療に目を奪わ

かれた。「どうなっているんですか」と詰める。看護主任が紙を持ってきた。「納得いかないことを書いてください」。もどかしく思いつつも、秋山さんは予約の経緯などを書いた。それが担当

事務所への訪問看護の依頼は、このころから増え始めた。医療費抑制のため診療報酬体系が在宅重視に改まり、病院も患者の入院日数を削りだしたからだ。秋山さんは在宅療養の広がりを受け、



蘇民袋を奪い合う裸の男衆ら。奥州市の黒石寺本堂で2日午前9分、岸本桂司撮影

を訪れた。千葉県野田市の江戸川と利根川の分岐点にある同県立関宿城博物館では、利根川の治水のために次第に東に流れを造りかえていった経緯の説明を受け、栃木県藤岡町の渡良瀬遊水地では、洪水や足尾銅山の鉱毒で20世紀初めに全村移転をした旧谷中村の史跡などを視察した。